

「VIEWnext 創刊記念セミナー」開催

子どもたちの「これから」を見据え、 「今」必要な教育を考える

ベネッセコーポレーションの教育情報誌『VIEW21』は、
2021年4月、VIEWnextへと名称を変更しました。
それに先立ち、2021年3月27日(土)、「VIEWnext 創刊記念セミナー」をオンラインで開催。
未来から今へと、バックカスティングの視点で構成されたプログラムを通じて、
学校教育の「今」と「これから」を、多くの視聴者とともに考えました。

開催概要

日時 2021年3月27日(土) 13時30分～15時40分 形式 オンライン (Zoom) 参加費 無料
主催 (株)ベネッセコーポレーション VIEW21編集部

プログラム

・開会挨拶

- ・特別講演 将棋棋士 羽生善治九段「予測困難な時代を生きる私たち人間に求められていること」
- ・基調講演 國學院大學 田村 学教授「コロナ禍の今こそ、『新学習指導要領』の要諦を改めて捉える」

・分科会

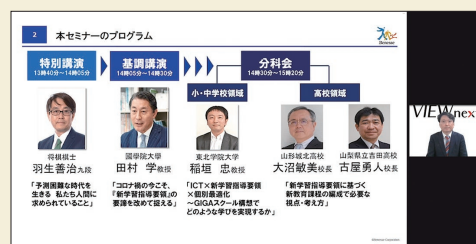
〈小・中学校領域〉「ICT×新学習指導要領×個別最適化

～GIGAスクール構想でどのような学びを実現するか～」東北学院大学 稲垣 忠教授

〈高校領域〉「新学習指導要領に基づく新教育課程の編成で必要な視点・考え方」

事例校による実践発表とベネッセによる解説

- ・特別プログラム 若手教師による、「私が考える 教育のnext」の発表
- ・閉会挨拶



開会挨拶

『VIEW21』から『VIEW next』へ ——今日までの歩み

セミナー開会にあたり、VIEW21編集部統括責任者の柏木崇が挨拶を行いました。

まず、1974年に前身の『進研ニュース』として産声を上げた教育情報誌『VIEW21』が、『VIEW next』へと名称変更をする理由を説明。「予想困難な時代だからこそ、自らの手で未来を描くことが求められる。21世紀のその先も、学校や先生方の今に寄り添い続け、ともに学校教育の未来を描くパートナーとなることを目指すという決意を示すために新たな名称にした」と述べました。

そして、「学校や先生方、教育委員会、保護者、地域など、『社

会に開かれた教育課程』実現の担い手と言われる、すべての方にとって、学校現場の今を捉え、未来を描くよりどころのような存在になることを目指すという点を踏まえて、学校教育の『今』と『未来』をつなぐプログラムを企画した」と説明。特別講演から特別プログラムまで、未来から今へと、バックキャストの視点で構成されたプログラムとした思いを伝え、本セミナーがスタートしました。

特別講演

将棋棋士 **羽生善治** 九段

**予測困難な時代を生きる
私たち人間に求められていること**



初めに、特別講演としてご登壇いただいたのは、将棋界の第一人者、羽生善治九段です。

教育やAIについても豊かな見識を持つ羽生九段は、100～120手に及ぶ対局内容を再現できるという棋士の記憶力を切り口に、学習能力の向上や集中力の高め方について解説。自転車の乗り方や楽器の弾き方の習得を例に、「物事を習得するために要した時間がその人の物差しとなり、新しいことに挑戦する力になる」と語りました。

続いて、将棋界でも大きな話題となっているAIについて言及しました。まず、AIと人間の違いとして、学習と推論を同時に行える人間の特性に着目し、例えば、ヘリコプターとドローンの識別について、人間は数十枚の画像を見た段階で推論をして両者を識別できるが、AIは何万枚もの画像を学習しないと両者の見分けができないといった点を指摘。人間の方が早く識別できるようになるのは、人間が学習と推論を同時に行えるからだとし、「未知のものにあふれた世の中では、学習と推論を重ねながら物事を選択、決断できる人間だからこそできることがあるのではないか」と述べました。また、将棋ソフトを例に、AIがある局面を評価する分析力にも誤差があり、「そこに人間の視点が入る余地があり、人間のみがイノベーションを興すことができる」と語りました。

最後に、「未来が予測できないのは、いつの時代も同じ。流動性の高い時代だからこそ、若者が活躍できるのであり、そうした教育を期待する」と述べ、未来の社会を築く子どもたちと教育関係者にエールを送りました。

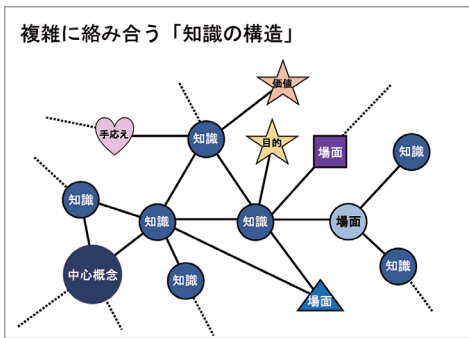
基調講演

國學院大學 **田村 学** 教授

**コロナ禍の今こそ、
「新学習指導要領」の要諦を
改めて捉える**

続く基調講演では、文部科学省で新学習指導要領の作成に携わった國學院大學の田村学教授にご登壇いただきました。

田村教授は、新学習指導要領の要諦が、社会で活用できる資質・能力の育成と、子どもの視点に立った学びの実現にあると説明。育成を目指す資質・能力が、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱に整理され、



田村教授は、「深い学び」について、図解をしながら説明。

『VIEW21』高校版 2020年10月号の特集では、田村教授が「主体的・対話的で深い学び」についてさらに詳しく解説しています。

[当該記事は、こちらをクリックしてご覧ください](#)

それらを踏まえて各教科の目標・学習内容の見直しや学習評価の充実が図られたとし、「目標・内容・評価の一体化がなされたことが、新学習指導要領の大きなポイントの1つ」と述べました。

「主体的・対話的で深い学び」については、授業に焦点をあてて解説。田村教授は、「主体的な学び」は、子どもが自分の意志で自覚的に目的を持って学びをコントロールすること、「対話的な学び」は、他者との対話により多くの情報を得たり発信したりして新たな知を創造することと説明。その上で、「深い学び」については、周囲との対話や調べ学習を重ねる中で、発言の質が高まり、学びに意欲的になっていく子どもの様子を事例として紹介しながら、「情報のインプットとアウトプットを繰り返す中で、複数の知識が関連づけられ、ネットワーク化することによって、知識が構造化・身体化されて高度化し、自在に『駆動する』状態であることこそが『深い学び』である」と、解説しました。

さらに、「知識を関連づける活用は、探究学習のプロセスの中で頻繁に見られる」と指摘し、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う過程で、知識・技能は繰り返し登場し、そこに他者との協働が行われることで、知識が「駆動する」学びの質がさらに向上すると説明。「『総合的な学習の時間』で探究学習を行った子どもほど、『全国学力・学習状況調査』では平均正答率が高いという結果が出ている。探究学習は、知識・技能の定着にも有効だ」と、見解を述べました。

最後に、2021年1月に発表された中央教育審議会『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）』で掲げられた「個別最適な学び」「協働的な学び」について、「『主体的・対話的で深い学び』と同様に、資質・能力の3つの柱をより豊かに確かに育むことを目指しているものであり、これまで先生方がつくられてきた学びの延長線上にある」と解説。特に、「協働的な学び」は、習得と探究の両方に重要であり、そのために学校の存在価値は一層高まると指摘し、「GIGAスクール構想によってICT環境が整えば、時間・空間を超えて学びのフィールドが広がり、『個の学び』と『集団の学び』の往還が加速する。その中で、教育課程を専門的にデザインできる教員集団と、学びに欠かせない仲間がいる学校は、これまで以上に重要な役割を果たす」と締めくくった。

分科会 小・中学校領域

東北学院大学 **稲垣 忠**教授

ICT×新学習指導要領×

個別最適化

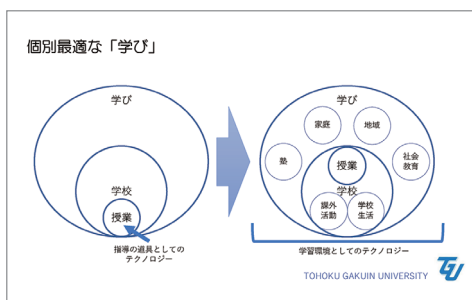
～GIGAスクール構想で

どのような学びを実現するか～

次に、校種別に2つの分科会が行われました。

小・中学校領域の分科会では、全国の学校でICT活用アドバイザー等を務める東北学院大学の稲垣忠教授が、ICTを活用した教育の個別最適化とGIGAスクール構想の現状についてお話しされました。

まず、稲垣教授は、新学習指導要領やGIGAスクール構想など、



ICTは、指導のツールとしての活用から、今後は、学校内外の学習を支える基盤へと移行し、それが個別最適な学びを後押しすると、稲垣教授は指摘した。

ここ数年の日本の教育行政の流れを確認。「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を軸に、子どもの特性や学習進度に合わせた教育、探究的な学びと多様な他者とのかかわりが強調され、教科等の授業時数の配分の弾力化、小学校高学年の教科担任制の導入、学習データやデジタル教科書の活用など、踏み込んだ施策が打ち出されたと説明しました。

稲垣教授がかかわる ICT活用についての学校事例も紹介。ある小学校では、タブレット端末を自宅に持ち帰られるようにしたところ、家庭学習の時間が増え、学習が苦手な児童は教員の個別指導を受けられるなど、子どもの状況に応じた適切な支援を行えるようになったと説明しました。また、稲垣教授が実践する情報活用型プロジェクト学習について、ICTを使って情報の収集・編集・発信を行う探究学習と、授業をデザインするための学習活動カードの活用法が紹介されました。

最後に、学習の基盤として重要な情報活用能力に関する自治体の取り組みが紹介されました。宮城県仙台市の事例では、情報活用能力を「活動スキル」「探究スキル」「プログラミング」「情報モラル」の4つに分類し、それぞれについての具体的な学習内容と該当単元を小・中学校の校種別に提示し、情報活用能力の育成を図っていると説明。また、ICTの活用により、学校での学びに加えて、家庭での学びや、家庭と学校との連絡の取り方などがどのように変化するかといった点について、具体例を挙げて説明したリーフレットを作成し、情報発信している東京都港区の事例が紹介されました。

それらの自治体の取り組みを踏まえて、「自治体として何を目標しているのか、教育委員会が的確にメッセージを発信することが重要だ」と、稲垣教授は強調しました。

分科会 高校領域

実践事例・解説

山形県・私立山形城北高校 山梨県立吉田高校

新学習指導要領に基づく 新教育課程の編成で必要な 視点・考え方

高校領域の分科会では、新学習指導要領の実施を1年後に控え、2022年度入学生の教育課程の編成について、高校2校が実践事例を発表。加えて、ベネッセによる、新教育課程の編成に必要な視点・考え方の解説が行われました。

実践事例の1校目は、山形県の私立・山形城北高校です。大沼敏美校長が、自校の教育課程編成の経緯と内容について発表しました。同校は、2020年度、全教師を対象に、生徒に育成したい資質・能力についてのアンケート調査を実施。その結果を踏まえて、自校の教育で「何が身につくのか」「どう身につけるのか」「どんな教育に力を入れるのか」を明確化し、重点目標として「ICTを活用した個別最適な学びの提供」「社会とつながる協働的な学びの実現」を掲げたグランドデザインを策定しました。

「新教育課程の編成」をテーマとした、『VIEW next』高校版 2021年4月号の特集では、山形城北高校、山梨県立吉田高校の実践を詳しく紹介しています。

[山形城北高校の記事は、こちらをクリック](#)

[山梨県立吉田高校の記事は、こちらをクリック](#)

『VIEW next』高校版 2021年4月号の特集では、新教育課程の検討の視点を詳しく解説しています。

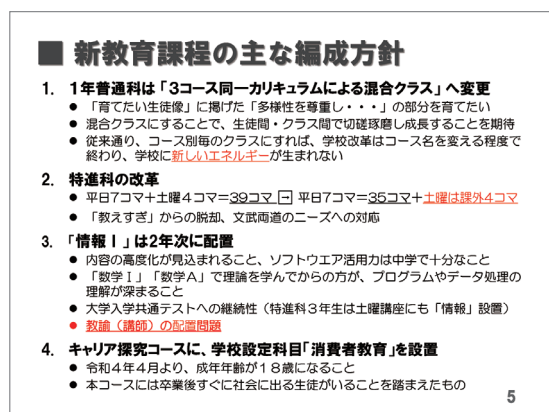
[当該記事は、こちらをクリックしてご覧ください](#)

それを基に校内で検討を重ね、2022年度入学生の教育課程の編成案を作成。さらに、多様な生徒の希望進路の実現を後押しするためにコース制を再編することや、ICT活用を多角的にサポートする教育プラットフォームとして「Classi」を導入し、個別最適な学びを実践することなどを紹介しました。

実践事例の2校目は、山梨県立吉田高校です。古屋^{ほやと}勇人校長が、自己肯定力・傾聴力・分析力などの8つの資質・能力から成る学校教育目標「吉田高校グラデュエーション・ポリシー（吉高GP）」の策定の経緯を説明。A Iの能力が人類を超えるといわれるシンギュラリティ（技術的特異点）の到来を挙げ、「高校時代に、生涯学び続ける力の基礎を築く必要がある」と強調しました。

新教育課程の編成に際しては、吉高GPがあったことで、編成の方針は教師間ですぐに共通理解が図れ、建設的な議論ができたこと、説明しました。そして、吉高GPの実現のために、3年間を通じて教科横断の視点で全体を俯瞰し、学習内容を精査しながら、教科・科目の配置と単位数の配当を検討。生徒の希望進路実現に向けて、効果的・効率的な教育課程の編成ができたこと語りました。

後半は、ベネッセコーポレーション・教育情報部の馬^{すなお}淵直が、全国の高校の新教育課程編成の状況や今後の検討の視点などについて解説しました。新教育課程の検討の視点としては、「自校で育成を目指す資質・能力から考える」「『総合的な探究の時間』を要に教科等横断的に考える」「生徒の希望進路の実現から考える」の3点が提示されました。

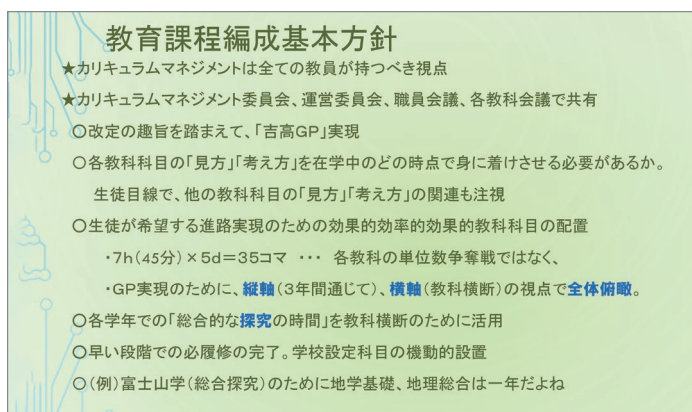


■ 新教育課程の主な編成方針

- 1. 1年普通科は「3コース同一カリキュラムによる混合クラス」へ変更**
 - 「育てたい生徒像」に掲げた「多様性を尊重し・・・」の部分育てたい
 - 混合クラスにすることで、生徒間・クラス間で切磋琢磨し成長することを期待
 - 従来通り、コース別毎のクラスにすれば、学校改革はコース名を変える程度で終わり、学校に新しいエネルギーが生まれにくい
- 2. 特進科の改革**
 - 平日7コマ+土曜4コマ=39コマ 平日7コマ=35コマ+土曜は課外4コマ
 - 「教えすぎ」からの脱却、文武両道の二コースへの対応
- 3. 「情報1」は2年次に配置**
 - 内容の高度化が見込まれること、ソフトウェア活用力は中学で十分なこと
 - 「数学1」「数学A」で理論を学んでからの方が、プログラムやデータ処理の理解が深まること
 - 大学入学共通テストへの継続性（特進科3年生は土曜講座にも「情報」設置）
 - 教諭（講師）の配置問題
- 4. キャリア探究コースに、学校設定科目「消費者教育」を設置**
 - 令和4年4月より、成年年齢が18歳になること
 - 本コースには卒業後すぐに社会に出る生徒がいることを踏まえたもの

5

山形城北高校は、新教育課程の編成を4つの方針ののっつて進めたと語った。



教育課程編成基本方針

- ★カリキュラムマネジメントは全ての教員が持つべき視点
- ★カリキュラムマネジメント委員会、運営委員会、職員会議、各教科会議で共有
- 改定の趣旨を踏まえて、「吉高GP」実現
- 各教科科目の「見方」「考え方」を在学中のどの時点で身に付けさせる必要があるか。生徒目線で、他の教科科目の「見方」「考え方」の関連も注視
- 生徒が希望する進路実現のための効果的効率的教科科目の配置
 - ・7h(45分)×5d=35コマ・・・各教科の単位数競争奪戦ではなく、
 - ・GP実現のために、**縦軸**(3年間通じて)、**横軸**(教科横断)の視点で**全体俯瞰**。
- 各学年での「総合的な探究の時間」を教科横断のために活用
- 早い段階での必修の完了。学校設定科目の機動的設置
- (例)富士山学(総合探究)のために地学基礎、地理総合は一年だよな

山梨県立吉田高校は、吉高GPの実現を目指すものとして新教育課程を捉え、編成の議論を進めたと説明した。

特別プログラム

実践事例

若手教師による、「私が考える教育のnext」の発表

分科会終了後、全体プログラムに戻り、若手教師2人の実践報告が行われました。2人は、全国の若手教師が地域を超えてつながり、互いの課題や実践を共有する「若手教師・教育創造ミーティング」(VIEW21編集部が運営)のメンバーで、2020年度の1年間の活動で得た気づきや思いを発表しました。

岩手県立^{とわの}遠野高校の佐藤^{こうだい}紘大先生は、自ら企画・立案したオンライン授業研究会と自校の探究学習について振り返りました。生徒が探究学習のまとめとして「学びの地図」を制作したことや、ループリックによる資質・能力の言語化の取り組みを紹介。1年間の活動を通じて、生徒と共通理解を図ることの大切さを感じたと述べました。今後の展望として、他地域の生徒とオンラインでつながり、特定のテーマを追究するワークショップを実施する構想を発表。「生徒が、チャレンジして振り返り、内省化することを通して、新しい価値観に気づかせる取り組みを実施し、地域を超えた探究学習を推進していきたい」と決意を述べました。

三重県立^{かんべ}神戸高校の森田歩美先生は、学習や学校行事の振り返りを見直し、生徒の表現力の向上に努めた取り組みを紹介しました。ICT活用も推進し、生徒とともにタブレット端末や電子黒板などの活用法を模索。「ICTに興味津々で、学習に活用しようとする生徒の姿を見て、ICTの可能性を感じた」と振り返りました。同ミーティングでの対話を通じて、自分を変える勇気と妥協しない気持ちを育んだという森田先生。失敗も数多く経験したものの、失敗は成功の元であり、挑戦するからこそ経験できると肯定的に捉え、「『挑戦』をキーワードに生徒と向き合っていきたい」と、今後の抱負を語りました。

開会挨拶

『VIEW next』が目指す、 ありたい姿に向けて 取り組んでいくこと

すべてのプログラムの終了後、VIEW21編集部統括責任者の柏木崇が挨拶に立ち、「本プログラムに象徴されるように、『VIEW next』は、21世紀のその先も、学校や先生方の今に寄り添い続け、ともに学校教育の未来を描くパートナーとなることを目指す」と、改めて伝えました。そして、そのありたい姿の実現に向けて取り組むこととして、『VIEW next』高校版は、新しいコーナー構成・誌面デザインで、高校教育の今を伝え、未来を描いていくこと、そして、ウェブコーナー『VIEW n-express』では、『VIEW next』高校版や教育委員会版の記事の補足記事や補足動画のほか、オリジナルコンテンツや速報的に学校現場に届けるべき情報の配信などを通じて、ウェブサイトでの情報発信をより充実させていくことを説明しました。

最後に、「『VIEW next』は、様々な形での情報発信にチャレンジしていきます」と抱負を述べ、本セミナーは閉会しました。